



## 「1億総活躍」の危うさ

柴生田 晴四  
(経済倶楽部理事長)

▼安倍内閣の改造に当たって、「1億総活躍」担当の大臣が任命されました。アベノミクス第2ステージの「新三本の矢」の最大の目玉が、これから加藤担当大臣が取りまとめる「1億総活躍」プランです。具体的には、女性や高齢者、障碍者の働く環境を整えることで、働く意欲のある人の雇用を増やし、潜在成長力のかさ上げを図ろうということのようです。

▼「新三本の矢」の中身を云々する前に、まず

この「1億総活躍」という表現を得々として打ち出したセンスに首をかしげざるを得ません。あの悲惨な戦争の末期に、時の為政者は、「1億玉碎」を国民に呼び掛け、敗戦に際しては「1億総懺悔」を打ち出しました。無謀な戦争に国民を駆り立てた反省を一顧だにすることなく、為政者の責任を棚に上げた、見事なまでに無責任かつ無神経な標語がこの国では唱えられたのです。

▼全国民を十把一からげにした政策は全体主義の発想です。何かにつけて、戦後の民主化を疑い、悲惨な結果に終わった旧憲法下の体制を擁護する政治家が、安倍政権には見え隠れしています。70年後の今、過去の過ちに眼をふさいで、「1億総活躍」と言い切つてし

まうセンスは、確かにこの内閣にふさわしいものかもしれません。

▼アベノミクスの「三本の矢」については、第一の矢である「大胆な金融緩和」と第二の矢である「機動的な財政出動」がとりあえず一定の成果を上げたと言えるでしょう。しかし、第三の矢である「投資を喚起する成長戦略」には見るべき成果がありません。安倍首相がダボス会議で大見得を切った、ドリルで岩盤を突き崩すことが実現できたとは到底言えないでしょう。しかし、これまでに何度も打ち出されてきた成長戦略の成否を検証することなく、今回新たに新三本の矢が打ち出されたのです。

▼善意に解釈すれば旧三本の矢の積み残しは

新三本の矢に受け継がれたと考えられます。それが「1億総活躍プラン」と言うことなのでしようか。第一の矢「希望を生み出す強い経済」、第二の矢「夢を紡ぐ子育て支援」、第三の矢「安心につながる社会保障」のいずれもが単なる政策目標であって、具体的な政策そのものではありません。そこが前回の三本の矢と根本的に違うところです。そもそも一人一人の国民がどのように活躍するのか、あるいは活躍しないのかは、まさに国民が自ら選択することです。国民主権の民主国家において、為政者が心がけるべきなのは、全国民に活躍を強いるのではなく、活躍を望む国民のために環境を整えることです。そこに「1億」という掛け声は不要なのです。